

続文化は、
今に生きる

いあわせた几董が、翌天明四（一七八三年）に刊行した『から檜葉』におさめた「夜半翁終焉記」に、こう書いていたからだ。

「…廿四日も夜は病体いと静に、言語も常とかはらず。やをら月溪をちかつけて、病中の吟あり、いそぎ筆をとるべしと聞るにぞ、やがて筆硯・料帛やうのものとり出る間も心あはたしく、吟声を窺ふに、冬鶯むかし王維が垣根哉

蕪村、最後の句について、詩人萩原朔太郎さんは、「天明三年、蕪村臨終の直前に詠じた句で、彼の最後の絶筆となったものである。白々とした黎明の空気の中で、夢のように漂っている梅の

白梅、夜が明ける

深澤芳樹

気あいと感じられる。全体に縹渺とした詩境であつて、英国

うぐいすやなにこそつかす藪のときこえつゝ、猶工案のようすなり。しばらくありて又、しら梅に明る夜ばかりとなり

した『郷愁の詩人と蕪村』岩波文庫。

こは初春と題を置べしとぞ。此三句を生涯語の限とし、睡れるごとく臨終正念にして、めで

句の初句に、強い違和感があつた。それは、天明三（一七八二年）二月二五日晚、蕪村臨終の場に

注『蕪村全集第七巻 講談社』

注『蕪村全集第七巻 講談社』

ところで龍太さんの父俳人飯田蛇笏さんは、四七歳で出版した第一句集『山廬集』で、山路見ゆ 滝川こしの 冬日和とし、七〇歳をすぎてから、山路見ゆ 滝川こしに 冬日和と書いた紙片を、書棚のこしていた。

後年この紙片を見つけた龍太さんは、これを書き損じと断じ、「なるほど原句の『』の方が一句の印象は鮮烈である。しかし、七十余歳ともなると、景の鮮烈さより、時に冬日の胎蕩にころひかれるところがあつたのではないか。ふと旧作を思い浮べて、ごく自然に『』と書いたのにちがひ

吉与謝蕪村『講談社』

唐の詩人であり画家の王維は、人間桂花落

夜静春山空

月出驚山鳥

時鳴春澗中

人閑かにして 桂花落ち

夜静かにして 春山空し

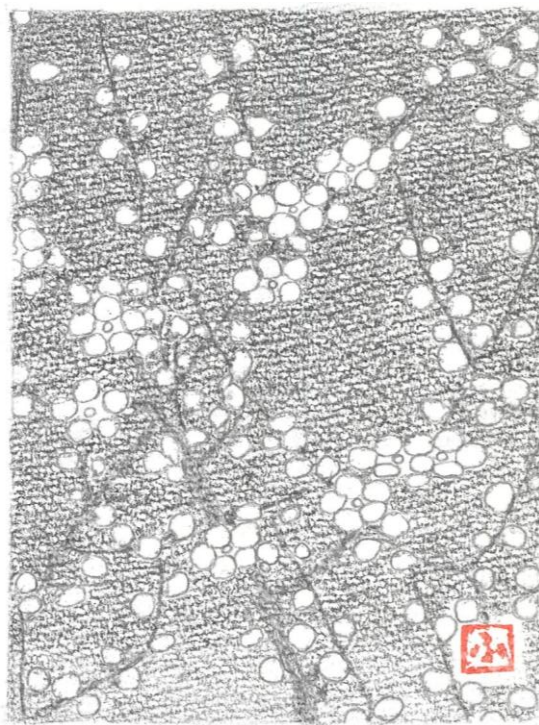
月出でて 山鳥を驚かし

時に鳴く 春澗の中

と、心静かに詠じていた。

こうして、『にを』の『に』に返したことで、あの句は、夜明けを迎える頃の白梅の美しい写生句から、自らが白梅に化し、異界と今、向おうとする蕪村の心象風景句、辞世句に、ようやくもどつた。

（日本考古学）



若冲画「梅花小禽図」から（深澤芳樹写）